

【特集】 追悼・岸本宏子先生

【目次】

追悼・岸本宏子先生

- ・岸本宏子さんの思い出（金澤正剛） p.1
- ・岸本宏子さんを偲ぶ（林淑姫） p.3
- ・追悼：記憶の中の岸本宏子さん（松下鈞） p.4
- ・岸本宏子先生を偲んで（酒巻和子） p.6
- ・岸本先生に導かれて（金井喜一郎） p.7
- ・岸本先生との思い出（大和紘子） p.9
- ・岸本先生との思い出（栗林あかね） p.11

- ・岸本宏子先生 略年譜・主要業績等一覧 p.12

事務局だより p.16

岸本宏子さんの思い出

金澤正剛

最初に岸本宏子さんとお会いしたのは、私が1966年の秋にアメリカから帰国して程ない時のことであったと思う。その頃の岸本さんは東京芸術大学大学院音楽研究科で、マドリガーレの歴史を研究しておられた。私自身後期マドリガーレのいわゆるマニエリスム様式、特にマレンツィオやジェズアルドの作品に興味を持っていたので、ごく自然に相談に乗るようになり、青山のお宅に伺ったこともあった。その際、ジェズアルドとは彼が領主であった町の名前で、彼自身はヴェノーサ公爵としてナポリ宮廷で活躍し、後に北方のフェッラーラの宮廷に滞在し、マレンツィオなどのマドリガーレの作曲家などとも交流したなどというような話をした。またマニエリスムとはまず美術史で使われた用語で、私がフィレンツェに住んでいた頃、すぐそばの礼拝堂にマニエリスムの代



岸本宏子先生（1943-2020）

画像提供：昭和音楽大学

表作として知られるポントルモの壁画があったという話もした。そのようなイタリアの文化を肌で感じるためにも是非イタリアに行かなくてはねと言ったら、勿論行くつもりですという答えだった。事実しばらくするとイタリアから便りが届き、ジェズアルドの町に行ってみたところお城は半分廃墟になっていて、全く関係のない人たちが住んでいたと書いてあった。さらにフィレンツェからはポントルモの名画の絵葉書が来て、ちゃんと現場を訪ねていますという報告が来た。さらに音楽や美術ばかりでなく、その土地の風物にも関心を持ち、各地の名物料理なども習って来たらしい。帰国後私の家にやって来て、ポーロニャ名物のトルテリーニという、小型餃子のようなパスタを目の前で作ってくれたが、その手際の良さに驚いたことを憶えている。

1969年に芸大の修士課程を終えた岸本さんは、翌年フルブライトの奨学金を得て、プリンモア・カレッジの博

士課程に進学した。それは当時プリンモアには、マドリガーレの権威アルフレッド・アインスタインのもとで学んだ経験を持つイザベル・カゾーさんが居られたからであった(実はカゾーさん、コロンビア大学で図書館学を学び、修士号を得て、一時ニューヨーク公共図書館に勤務していた経験がある。その背景が後に岸本さんに与えた影響は極めて大きかった可能性もある)。ただし博士課程を終わるまでずっとプリンモアに居る必要は無く、イタリアに行ったり、帰国されたりもしていた。一方私もフィレンツェにあるハーヴァード大学のルネサンス研究所やアメリカの大学に招かれたりして、日本を出たり入ったりしていたが、折に触れて岸本さんとも連絡を取り、情報を交換したりなどもしていた。上記に述べたエピソードの中には、この時期に経験したのもあったように思う。1975年にはプリンモアから哲学博士号(音楽学)を得たが、その間研究資料の収集と整理を通じて図書館の重要性を痛感した結果、1978年にはボストンのシモンズ・カレッジで図書館情報学を学ぶようになり、1980年には修士号(M.L.S.)を得るに至った。こうして岸本さんは日本では極めて珍しい音楽図書館学の専門家とされたわけである。その果実としては佐藤みどりさんと1985年に出版した『音楽の基礎資料』(アカデミア・ミュージック)がある。音楽に関する図書、楽譜、さらには録音資料を含めての内容は極めて特異なものであって重要である。一方1970年代に活動を開始した音楽文献目録委員会(RILM 日本支部)において中心的な活躍をしてくださったが、更に1979年に国際音楽資料情報協会(IAML)日本支部が発足した際にも重要な役割を果たし、その後も同協会の運営に深く関わってくださった。2002年には昭和音楽大学の教授に就任し、2017年に退職された時点で名誉教授になられた。

岸本さんが1989年に出版した『ルネサンスの歌物語』(音楽之友社)は専門であるイタリアのマドリガーレ、それも特にルーカ・マレンツィオを主とした内容ではあるが、実はそれ以上に西洋音楽史を広くとらえたもので、音楽に限らず一般の西洋史、さらには哲学、文学、美術をも意識して書かれたものである。岸本さんの人となりがそのまま本になったような著書と言って良いのではないだろうか。愛の神アモーレを案内役にして、古代ギリ

シャにさかのぼって神々の特性を明らかにし、東西ローマ帝国からカール大帝の偉業とヨーロッパの歴史を駆け足で通り抜け、ヨーロッパ、地中海、そしてイタリアと次第に地域を絞った結果、最終的にイタリア・ルネサンスの背景を明らかにしながらイタリア歌曲の世界に到達し、マドリガーレやヴィラネッラの魅力をマレンツィオの作品を中心に論じるという、極めて説得力のある話の進め方である。特にフィレンツェのフェスタ好きからオペラが誕生し、モンテヴェルディに至る歴史にも触れて、16世紀に栄えたイタリアの歌曲の魅力を生き生きと描いている。

さらに岸本さんは自分なりの西洋音楽史の著書を完成させたいという目標を持っておられた。しかもそれは編集出版の専門家であるご主人との共同作業にしたいという個人的な思いもあった。ところがそのご主人の定年退職が迫り、しかも致命的な悪病に罹られていたことが分かった。岸本さんは自分一人では間に合わないと判断し、自分は著書全体の構成と序章および古代からルネサンスまでの部分を担当し、バロックから古典派は酒巻和子さん、オペラの歴史は小畑恒夫さん、ロマン派から近現代の一部は石川亮子さん、さらに近現代の残りを有田栄さんと、親しい専門家と共同で書き上げることとした。内容はすべて簡潔に最低限必要なことに限り、専門家や愛好家よりも一般の読者に分かり易いことを心がけた。たとえばご自分が専門のルネサンス時代も15~16世紀を3つに分けて、初期はブルゴーニュ、中期はフランドル、後期はイタリアという、実に単純明快な説明である。さらにそのような歴史を視覚的に感じるように河合千明さんによるイラストで全体の雰囲気を作り上げた。こうしてめでたく『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』がアルテス・パブリッシングによって2020年10月31日に出版されたのだが、残念ながらご主人ばかりでなく岸本さんご自身も出版を目前にして、同年10月9日に天国に召されてしまった。さぞや出来上がった本を手にとってご覧になりたかったであろう。親しい友人としては心からご冥福を祈るばかりである。

(国際基督教大学名誉教授)

岸本宏子さんを偲ぶ

林淑姫

岸本宏子さんが他界されたことを仕事先の和歌山で聞いた。前日（10月9日）に息を引き取られたという。暫く連絡が途絶えていたことが気懸りでいた矢先だったから突然の訃報にことばを失った。頼もしい先輩であり仲間でもあった友を喪ったことの切なさは日を追うにつれて深くなる。

岸本さんに初めて会ったのは 40 年程前、西麻布の遠山音楽図書館で、毎週一日顔を合わせていた。岸本さんは村井範子先生のとを継いで選書や資料分類、私は図書館の仕事を始めたばかりのアルバイトでカード目録の作成やたまにやってくる閲覧者の応対をしていた。当時の遠山音楽図書館はまことにのんびりとした大らかな職場で常勤職員も非常勤もそれぞれの仕事を各自のペースで果たすといういわば集团的自主管理。ライブラリアンを生涯の職業とすることがあろうとはあの頃誰も考えていなかった。

西麻布界限は岸本さんにとってなじみの場所で、東京女学館に隣接してお祖父さまの邸宅があり、彼女も小学生のころまで同居されて女学館に通ったそうで「勝手知ったるわが町」という風だった。そのお祖父さまが実は東京女学館の校長を長く務められ、日本女子教育界の泰斗と称された澤田源一氏だったことは随分あとになって書物で知った。

岸本さんはその頃東京藝大で非常勤講師を務めていたが、ボストンのプリンモア・カレッジ博士課程に在籍中でイサベル・カゾー教授のもとでルネサンス期の作曲家マレンツィオをテーマとする論文の準備にかかっており、そのための資（史）料調査にボローニャにも一年滞在したあとの一時帰国だった。どうして彼女の指導教授のお名前まではっきり覚えているかという、カゾー先生が女性としても研究者としてもいかに魅力的で優れた方であるかを幾度となく聞かされたからだ。憧れの教授に可愛がられたボストンでの学生生活は苦勞もあったろうが楽しく心弾むものだった。ボローニャには大学からの奨学金を得て滞在していたが、その間に親しくなったライ

ブラリアンたちの紹介で、同地で開催された IAML 国際大会に参加したことが IAML とつながるきっかけになったという。

論文を提出し博士号を取得したあと、岸本さんはライブラリアンの途を考え始めたようだ。ボローニャでの図書館体験と、課程修了後のニューヨークでバリー・ブルック教授の警咳に接したことが動機だったらしい。シモンズ・カレッジでの図書館学の学びは、専門図書館のライブラリアンは図書館学を修めたその分野の研究者が務めるという先進諸国の実態に基づくものであったかもしれないが、むしろご自身の性向がそれを選ばせたように思う。ボストンの図書館員仲間から得た“Scholars are competitive and librarians are cooperative.”は彼女が好んで口にしていた文句だったから。

図書館学の学びとその後築かれたアメリカを中心とした音楽図書館の人脈は岸本さんにとっても日本の音楽図書館界にとっても大きな財産だった。私たちは岸本さんを通じて世界の音楽図書館界の「常識」と「水準」と「動向」をつぶさに知るところとなった。RILM 国内委員会をはじめ、IAML 日本支部や音楽図書館協議会に関係した仕事に次々に取り組まれていたが、その本領がもっとも発揮されたのは 1988 年の IAML 東京会議であろうか。会議の成功はひとえに事務局長を務められた彼女の誠実な人がらと手腕によるものだ。開催受諾の論議に始まる細かな準備のプロセス、実行委員会のとりまとめ、会議プログラムの設定と人選、煩雑な作業を次々にこなしていく采配ぶりに目を瞠った。健康上の不安を抱え、またお母さまを歿された直後のことで気遣われたのだが、そんな様子はちらりとも見せなかった。婚約したばかりの正之さんの存在に支えられていたからだと思う。

病癒えて昭和音楽大学に迎えられた岸本さんは「司書課程」を設けられた。わが国最初の音楽大学における司書養成課程の設置にはなかなかの苦勞があったと察せられるが、学内事情に触れることもあってか多くを語らず、講座の特別講義に招かれて顔をあわせた際にも特段の話は聞いていない。この「司書課程」の設置は、DDC20 版 780（音楽）に基づいて作成された「MLAJ 音楽分類表」（1990）とともに、日本の音楽図書館界に残された大きな遺産だと思う。

岸本さんはいつもにこにここと笑みを絶やさず周囲を和ませる名人だったが、気性が真つすぐで不条理な間違いに我慢ならないひとでもあった。ご自身書いていることだから言っても差支えないと思うが、留学から帰ってまもなく新設の音楽情報学科の助教授として迎えられた音楽短大でオーナー経営者の理不尽に立ち向かった事件、某委員会で分類体系をめぐる激しく対立したこと、日本版ニューグローヴの編集方針を根底から改めさせたことなど思いつくだけでも幾つかある。周到的理論に裏打ちされた岸本さんの主張は常に至当で、誰も反することはできず結局は従うけれども、必ずしも本心から納得しているわけでもないから一方的な蟠りは残る。蟠りはことがらが重大であればある程大きい。だから顛末を語る時の岸本さんはいつも悲しそうだった。論理が論理として無心に通らないことに傷つき悲しむ。正之さんはそうした決して器用とはいえない生き方を含めて岸本さんを丸ごと受けとめすっぽりと包み込んでいた。結婚されたからの岸本さんは傍からみてもいかにも幸せそうで安心していて微笑ましかった。

5 年前に正之さんに先立たれた岸本さんの歎きは深く重く、心身ともに萎えて窶れて心が痛んだ。大学を退かれてからはいっそうで、佐藤みどりさんと「思い出のロブスターでも食べに行きましょうよ」と無理やり連れ出してお台場までご一緒したのが最後になった。ご冥福を祈ります。感謝をこめて。

(旧日本近代音楽館主任司書・事務局長)

追悼：記憶の中の岸本宏子さん

松下鈞

岸本宏子さんと初めてお会いしたのは 1967 年春、渋谷区広尾にあった遠山音楽図書館でした。当時、遠山音楽図書館は皆川達夫先生主宰の中世音楽合唱団の練習場でもありました。中世音楽合唱団は中世・ルネッサンス期のオルガヌム、モテット、シャンソンなどをレパートリーとする歴史ある合唱団で、そうした音楽が好きな人の集まりでした。正直なところ、岸本さんも私も美声の持ち主ではなく、それぞれのパートを控えめに歌って末席を汚していました。その後、岸本さんはイタリアとアメリカに留学され、音楽学の研究を深められました。岸本さんはボストンのシモンズ・カレッジで音楽図書館学の学位を取得された初の日本人でした。なぜ音楽図書館学の学位取得を目指したのかは残念ながら伺う機会はありませんでした。帰国後の岸本さんとの関わりは、音楽図書館協議会 (MLAJ)、国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部、そして『ニューグローヴ世界音楽大事典』の翻訳出版など音楽資料と音楽図書館をキーワードとして細く長く続きました。

MLAJ 事務局長だった私は、岸本さんの本場仕込みの音楽図書館学の知識と技術と人脈とを頼りにしていました。岸本さんは MLAJ の数々の研修会やセミナーの講師として、或いは『MLAJ Newsletter』や論文集への寄稿者として、また目録と分類の専門委員として、惜しみなく専門的な情報を提供してくださいました。特に、わが国でもオンライン目録ネットワーク化が現実のものとなりつつあった 1980 年代から 1990 年代にかけては、アメリカでの音楽図書館体験も踏まえ、音楽 MARC や音楽分類法に関する最新動向をもたらしてくださいました。セミナー等の発言者席での岸本さんのマイクロフォンの持ち方は独特でした。ハンドマイクの根元を掴み、マイクの入力部分をテーブルにむけてブラブラさせながら小さな声で話すのです。録音の為の音声がかうまく拾えないので脇から何度も持ち方を注意させてもらったことがありました。この分野における岸本さんの業績は、『MLAJ Newsletter』や公開講座記録集『コンピュータ時代の図

書館と主題検索』(1984) 所収の「十進分類法にファセット分類を追加した音楽分類表：デューイ十進分類表音楽部門改訂案について」、論文集『音楽情報と図書館』(1995)所収の「音楽資料の分類と検索：DDC の日本における使用の実際」などに表れています。

IAML 日本支部創設前の 1979 年春、西麻布の遠山音楽図書館の一隅で行われた、遠山一行先生（遠山音楽図書館館長、MLAJ 理事長を兼務）、村井範子先生（IAML の日本人会員、村井先生も昨年末にご逝去されました）と私（MLAJ 事務局長）の話し合いにも IAML 会員の岸本さんは立ち会っておられました。IAML の年次大会に毎年のように参加されておられた村井先生は、H. Heckmann さんからの要請を受け、日本支部の立ち上げに奔走されていました。IAML 日本支部を立ち上げるに際して、村井先生のご心配は MLAJ の個人（賛助会員）と IAML 日本支部への参加可能性のある個人とのバッティングでした。欧米の IAML 会員はなんらかの形で組織との関わりをもっていますが、日本から加入していた IAML 会員は国内の音楽図書館等との関わりが薄く、影響力もありませんでした。今になってみれば、MLAJ と IAML に団体会員と個人会員との活動や協同の仕方にさまざまな可能性が考えられますが、1979 年までは音楽図書館や音楽資料をテーマとした国内組織は MLAJ が唯一のものでした。MLAJ には図書館等の組織と個人の賛助会員が参加していました。村井先生は個人が MLAJ に流れることを危惧され、IAML 日本支部は個人による学会のような組織にしたいと熱弁を奮っておられました。立ったままの議論の中で、「MLAJ は音楽図書館などの団体会員をメインにした組織、IAML 日本支部は個人会員を中心とした組織として棲み分けすればいいんじゃない？」と岸本さんが静かにおっしゃると、村井先生のそれまでの激しい弁舌は収まり、棲み分けが決まりました。その後、1988 年の降って湧いたような IAML1988 東京会議では、岸本さんが大会事務局長を務められ、日本近代音楽館の林淑姫さんと私が事務局を担当して悪戦苦闘したのも懐かしい思い出です。

音楽司書を養成することは岸本さんの悲願だったと思います。しかし、尚美音楽短期大学のカリキュラムは岸本さんの目指すものとはまったく異なるものでしたし、

わが国の音楽大学に初めて開設された昭和音楽大学の司書課程も音楽司書養成に特化したプログラムではなく、文科省の省令科目に基づく公共図書館の「司書」の養成コースにとどまっていたことには忸怩たる思いもあったことでしょう。毎年 1 月になると、司書課程の学生向けの特別授業で、わが国の音楽図書館の活動などのトピックスについて話すよう求められ、新百合ヶ丘のキャンパスに行きました。ある時、スラックスのベルトをし忘れたままであることに気づき、新百合ヶ丘駅に降りると慌ててベルトを売る店を探しました。しかし、どこのお店も開店前でした。窮余の一策、駅構内のコンビニで僱用の黒ネクタイを買い求め、それをベルト通しに潜らせて縛ってなにくわぬ顔で教室に向かいました。授業が終わった後、大学の近くで食事しながら、その恥ずかしいエピソードを告白しました。大笑いされると思いきや、静かにほほ笑んだだけだったことも懐かしい思い出です。

学生時代から半世紀以上にわたる交友関係の中から MLAJ と IAML に関わる記憶にある岸本宏子さんのエピソードでした。

冷静沈着、決して激することのない穏やかな岸本宏子さんを懐かしく思い出します。

合掌。

(元 MLAJ 事務局長)

岸本宏子先生を偲んで

酒巻和子

昨年 10 月に岸本宏子先生の訃報が飛び込んで来たとき、にわかには信じ難く、まさに絶句してしまいました。しばらくご体調不良とはうかがっておりましたが、命にかかわるようなことであったとは思ってもよらず、本当に残念なお別れになってしまいました。

私は岸本先生が非常勤講師として初めて昭和音楽大学にいらした平成 6 (1994) 年からご退任まで、特に平成 14 (2002) 年に先生が教授に就任されてからはさまざまな場面でご一緒させていただき、長くお世話になりました。

先生が大学院教育に力を入れて取り組んでいらした頃の楽しい思い出のひとつに「院生ツアー」と称していたものがあります。修士論文を書く前に身につけておくべき資料検索の方法を学び、図書館の利用を実際に体験することを目的に、修士課程 2 年生になる直前の学生を引率して都内各地の図書館などを巡るのです。今日のように自宅にいながら世界中の論文を検索できたり、洋書や楽譜を即座に入手したりできる時代ではありませんでした。また当時の厚木キャンパス周辺に住む地方出身の学生にとっては、ひとりで都心に出て地下鉄に乗ることに勇気がいるのではないかと、という先生の配慮から計画されたのです。例えば平成 16 (2004) 年 2 月には、2 日に分けた日程で、日本近代音楽館、アカデミア・ミュージック、民音音楽博物館、東京文化会館音楽資料室、国立国会図書館を見学させていただきました。訪問先はいずれも岸本先生のご関係の深い所でしたので、なごやかにご案内いただき、貴重な資料のご説明などをありがたうかがうことができました。そして途中で表参道のカワイ、銀座のヤマハ、秋葉原電気街の CD ショップ、神保町古賀書店等々で、貴重な自由時間を設けていました。学生の研究テーマをあらかじめ把握できていた時などに、先生が適切な資料を紹介していらしたことに感服しましたし、喜ぶ学生たちを見て先生も本当に満足そうでした。都営バスの車窓から湯島天神の白梅を見たことや大きな東京タワーを見上げたことなどとともに、懐

かしく思い出されます。

昭和音楽大学のキャンパスが新百合ヶ丘に移転した平成 19 (2007) 年、音楽学関係の専任教員が集まった研究室を先生は大変喜んでいらっしゃいました。共有スペースと個室が分かれた形になっており、岸本先生と酒巻のほか、小畑恒夫先生、有田栄先生、そして石川亮子先生が並んでいました。岸本先生は、私にとって楽理科の錚々たる方々のそろった先輩のおひとりであり、また次の世代の人たちにとっては実際に学生時代に教えを受けた「先生」でした。偉大な音楽学者でありながら研究室での素顔は飾らないお人柄で、先生のシンボルであるヒツジのグッズに囲まれながら、母親のようなおおらかさと責任感をもって私たちに接して下さっていました。さまざまな場面で先生に適切なお助言をいただいたこと、問題解決のために知恵を出し合ったことなども数えきれません。大学の移転と同時に先生とご主人の金子正之さんは小田急多摩線沿線に転居されましたので、研究室のメンバーでお邪魔したこともあります。自然が豊かで、近くに小学校があつてにぎやかなことも気に入られたとのことでした。新百合ヶ丘駅周辺にも、持ち前の好奇心を発揮されてよく探索に出かけていらしたようです。ごくたまにですが、先生ご推薦のお店に皆でランチに出かけたこともありました。

平成 19 (2007) 年に図書館長、平成 21 (2009) 年に大学院音楽研究科長に就任されてから、先生の先見の明と実行力がますます発揮されました。研究業績については改めてご紹介する必要もないと思いますが、翻訳書『上手に歌うための Q & A—歌い手と教師のための手引き書』(平成 21 年)をはじめ、学内外の研究者との共同研究においても『音声学の学際的研究のための基礎研究』(平成 21~22 年度共同研究報告書)、『「歌う声」をめぐる学際的研究』(平成 22~24 年度報告書) 等々多くの成果を発表されました。そして平成 24 (2012) 年に大学・短大に司書課程の設置、平成 26 (2014) 年には博士後期課程の設置が実現し、昭和音楽大学の充実と発展に先生が多大な貢献をされたことはだれもが認めるところです。

先生は「将来引退しても、昭和音大のテアトロ・ジョーリオ・ショウワやユリホールのコンサートに来たり、キャンパス内のイタリアン・レストランに来たり、もちろ

ん図書館にも足を運んで来るから、きっと退屈しない楽しい毎日になると思う」とよく話されていました。でも、その退職後の生活を一緒にされるはずだったご主人を平成 27 (2015) 年に亡くされてしまったのです。平成 29 (2017) 年 2 月 26 日に行われた最終講義で資料として配付されたご自身の年表の中にも「配偶者死去。強度のストレスで岸本は心身の不具合が続く」という 1 行が記されています。最終講義のテーマは「そして、生きる」でした。大きな悲しみが癒えない中での講義だったと思われませんが、留学時代を含め、先生の足跡をたどるお話は初めてうかがうことも多く大変興味深いものでした。毎日のようにお目にかかりながら、それぞれが時間に追われてばかりでしたので、もっとゆっくりお話を聞くことができればよかったのにと、今さらながら悔やまれる思いです。

退職された先生に少しでも元気を取り戻していただけるようにと、私たちは、かつて先生とご主人とによって企画されたまま長らく中断していた「西洋音楽史」の共著の執筆再開を試みました。アルテスパブリッシングの木村元さんとイラスト担当の河合千明さんのおかげで令和 2 (2020) 年 10 月末に出版が実現する運びとなり、その最終稿を先生にご確認いただけたことは、私たちにとってせめてもの救いとなりました。

同じ大学の教員として勤務しながら先生と親しくさせていただいたことは、私にとってかけがえのない財産です。何事においても先生の足もとにも及びませんが、次の世代への中継ぎ役として、今は与えられた職務を精一杯務めたいと思っております。先生のご功績を偲び、心より感謝の気持ちを捧げたいと思います。岸本宏子先生、本当にありがとうございました。

(昭和音楽大学教授・附属図書館長)

岸本先生に導かれて

金井喜一郎

【はじめに】

岸本宏子先生は長らく昭和音楽大学で教鞭を執られていました。私自身も同大学に 20 数年間勤務しておりましたので、岸本先生にはさまざまな場面で大変お世話になりました。ここでは昭和音楽大学時代の思い出を振り返り、岸本先生を偲びたいと思います。

【出会い】

何気ない場面をずっと忘れずに覚えていることがあります。岸本先生との「出会い」もその一つです。正確な年代は覚えていませんが、おそらく 2000 年よりも前だったと思います。私が昭和音楽大学附属図書館のカウンターで利用者対応をしていると、キャリーバックを引いて辺りを見回しながらマッシュルームカットの女性が入館してきました。いかにも「声楽家」や「ピアニスト」といった方々を見慣れていたので、その光景に少し驚いたように記憶しています。なお、この女性が岸本宏子先生だと知ったのはそれから数年後でした。

【大学院の授業】

非常勤講師を経て昭和音楽大学の専任教員に着任された岸本先生は、その後図書委員長や図書館長を歴任されました。これによって附属図書館や図書館員との関係が深まり、私自身も岸本先生とお話する機会が増えました。

そのような中での 2003 年のある日、岸本先生から「大学院の授業内でデータベースの利用方法を説明してもらいたい」と打診がありました。断る理由は何もなく、喜んでこれをお引き受けしました。これが私にとって初めての「大学の授業」でした。今思えば、この経験が今につながる一つの出発点になったのかもしれない。

【オスロ大会】

大学院での授業を終えて間もなく、再び岸本先生から打診がありました。IAML という組織があって毎年国際大会を開催しており、日本支部では「若手図書館員」の参加補助を行っているということをご説明いただきました。その上で、2004 年のオスロ大会の参加補助の申請を

勧めてくださいました。大学院の授業に参加させていただいたことで気持ちも高まっていたので、特に躊躇することなく、申請したい旨をお伝えしました。

しかしながら、その後問題が発生しました。私自身が、申請資格(条件)の「図書館員」ではなくなってしまったからです。昭和音楽大学では多くの大学と同様に、図書館員という職種はなく、図書館は事務局の一部署にすぎません。当然、事務職員には人事異動があり、私は 2004 年 5 月から他部署へ異動することとなりました。普通なら補助申請を取り下げることになるのですが、岸本先生は役員会に働きかけてこの条件を変更してくださいました。その結果、条件が「図書館員」から「個人会員」に変わり、私の申請は認められました。

さらに岸本先生は、「何も知らないあなたを一人で行かせるわけにはいかない」と、無知な私を見守るために自らオスロ大会に参加してくださいました。参加にあたっては、旦那様とご兄弟が同行されました。旅行を兼ねるということでご家族を説得されたのだと思います。そこまでして私の見守り役をしてくださったわけです。オスロ大会の詳細につきましては Newsletter No.24 にて報告させていただきましたので詳細は省略しますが、まさに衝撃的で、私自身のその後の進路を決定づけました。



オスロ大会にて
(右から岸本先生、ご夫君、そのご兄弟)

【司書課程設置】

図書館より他部署へ異動後は、情報機器の操作に関わる科目の非常勤講師を兼務しながら、粛々と業務をこなしておりました。一方で、先の見えないまま密かに図書館情報学を学んでおりました。そして何事もなく数年が過ぎ、2010 年頃だったと思いますが、何の前触れもなく、司書課程関連の設置について検討する役目が回ってきました。たまたま異動先の部署にそのような役割があったからです。そこで岸本先生と私が、担当予定教員と担当事務局という立場で原案を検討することになりました。当初は専門のコースを設置する案などもあったのですが、大学運営側との協議を経て、最終的には各コース共通の司書課程を設置する案に収まりました。

ほぼ同時に担当教員の選出(採用)の検討となりましたが、そこで初めて私自身にその資格があることを公表しました。一方、カリキュラムの設定にあたっては、音楽大学ならではの科目を設けたいとの思いから独自科目「音楽図書館特論」を開設しました。ご担当はもちろん岸本先生です。

こうして必要書類の届出を行い、2012 年 4 月に司書課程を設置することが決まりました。あとは 4 月の授業開始を待つだけとなりましたが、岸本先生は 2012 年になると、最新の情報を入手するために、2 月に開催された米国音楽図書館協会 (MLA : Music Library Association) の年次大会に参加されました。

【司書課程運営】

当初の岸本先生の担当科目は、「音楽図書館特論」のほかに「図書館概論」、「図書館情報資源概論」、「児童サービス論」、そして「図書館実習」(金井とともに担当)でした。

独自科目「音楽図書館特論」については、卒業年次に半期 15 回の科目として開講しました。岸本先生が計画された授業内容は、「図書館と音楽資料」、「音楽関連資料と司書」、「利用者のニーズ」、「司書に求められる音楽の知識と技能」、「音楽資料の目録法・検索法の特殊性」、「音楽資料の組織化」、「音楽情報サービス」、「音楽資料の選択とコレクション形成」、「音楽資料の保存と電子音楽図書館」、「専門職としての音楽司書に求められるもの」、「楽譜と楽譜出版の歴史」となっており、ここに音楽図書館

見学や特別講師による講義（3 回）が加わります。このように充実した内容を岸本先生に教えていただくのですから、私は学生たちに「昭和音大で岸本先生に音楽図書館の授業を受けたことが自慢になるよ」と伝えました。

【その後】

岸本先生は司書課程のみならず、一時期、大学院の研究科長も務められていました。このため昭和音楽大学には無くてはならない存在であり、定年延長のかたちで在職されていましたが、仕事が一段落したことを受け、2016 年度末でご退職することとなりました。

「音楽図書館特論」は岸本先生の担当が前提の科目だったため、後任をみつけることは容易ではありません。そこで「音楽図書館特論」は廃止とし、一方で私が別途担当していた「図書館サービステ論」を「音楽図書館サービステ論」と名称変更することで科目名に音楽が付く科目を残す形としました。

退職にあたって岸本先生は、留学先のシモンズ・カレッジで学んだときの資料や、音楽図書館協議会等の会議資料など一式を「もう私はいない」と言って、私（金井）に託されました。しかしながら、その後私自身も昭和音楽大学を退職したため、それらの資料を活用する機会はありませんでした。これについては、大変申し訳なく思っています。

【さいごに】

岸本先生は 2016 年度末にご退職後も、ときおり昭和音楽大学にいらしていたようです。私も何度かお見かけしましたが、お元気そうに見えました。ただ私も 2018 年度末で昭和音楽大学を退職したため、それ以降はお会いする機会がありませんでした。

私は、岸本先生に大学院での授業に呼ばれて以降、司書課程の運営に至るまで、ずっと岸本先生に導かれてきたように感じています。昭和音楽大学以外においても、IAML 日本支部の 2014-2016 期には、岸本先生のお誘いで例会担当も務めさせていただきました。

岸本先生、いろいろありがとうございました。これまでのご指導に感謝を申し上げるとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

（相模女子大学准教授）

岸本先生との思い出

大和絃子

岸本先生は、日本の音楽図書館界の発展にあらゆる面でご尽力された先生でした。図書館員は、資料と利用者を繋ぐ大切な役割を担っていますが、先生は、資料と人を繋ぐだけでなく、人と人を繋げてくださる方でした。先生が残された功績については、私が申し述べるまでもありませんが、優しい笑顔とユーモアで昭和音楽大学附属図書館を先導してくださった先生との思い出を、僭越ながら書かせていただきます。

先生に初めてお会いしたのは、約 15 年前、私が音楽図書館について何も知らずに昭和音楽大学附属図書館に入職した春でした。私は、他校を卒業後、現在まで同図書館に勤務しております。図書館のカウンター越しに、私の出身校や専攻、図書館に関する知識などを質問されたことを覚えています。先生が日本の音楽図書館界における第一人者であることは存じ上げていましたので、緊張と動揺で、質問に対して的を射ない回答をしていたと思います。しかし、そんな無知でおかしな回答をする他大学卒業の若者に対しても、先生は終始穏やかに優しく接していただきました。その後も、10 年以上にわたりご指導くださり、ご自身の経験や知識を惜しみなく注ぎ、どんな事でも相談に乗ってくださいました。私がレファレンスで困っている時は、一緒にカタログを開いてくださり、レファレンスツールについても教えてくださいました。先生は、博識だけでなく、人間的にも大らかで優しい先生でしたので、多くの学生に慕われていました。退官された後も、時々、いつもの笑顔で大学に足を運んでくださり、図書館の様子や私のことを気にかけてくださいました。たとえご自身の体調が優れない時でも、周りのことを心配してくださる先生でした。ここ 1 年以上、姿をお見かけしなくなり心配していましたが、ご逝去の知らせを聞いた時は、館員一同驚きとともに深い悲しみで一杯になりました。

先生との 1 番の思い出は、本学図書館キャラクター「シヨールーム」です。先生が「昭和音大」の「本の虫」で「シヨールーム」という名前のキャラクターを作るのは

どうだろうと、アイデアをくださいました。それは楽しそう！となり、利用者からの公募と投票でショーワームのキャラクターデザインが決まりました。ショーワームの誕生で、利用者と図書館の距離が近くなったことを実感しました。その後も、様々な場面で、学生や教員と図書館を繋いでくださいました。特に、大学院生を図書館ツアーの案内役や図書館アルバイトとして採用した時は、ご協力いただきました。先生には、「利用者とともに楽しい図書館を作る」という大切な事を教えていただきました。

先生はデジタル技術に関しても強く、特に、本学の図書館システムリプレースの際は、大変お世話になりました。先生の人脈で他音楽図書館へ訪問する機会を設けてくださり、各館の図書館システムを見ながら、音楽資料の目録について情報交換をさせていただきました。訪問先では、多くの方から、学生時代に岸本先生に教わっていた話を伺い、改めて、先生の人脈の広さや信頼の深さを感じました。先生も同行して下さった見学会はとても楽しく、音楽図書館間の相互交流の場を作って下さったことは、本当にありがたいことでした。見学の合間に連れて行ってもらった、上野の明石焼きがとても美味しかったことを懐かしく思い出します。

先生は、本学図書館長としてのみならず、研究紀要の編集長としても、図書館を支えてくださいました。紀要刊行に至るまでの業務体制を整えてくださり、音楽論文を専門とする編集者の方も紹介してくださいました。研究紀要に限らず、先生は、専門的な知識と経験で、私たち職員を牽引し、業務改善に協力してくださいました。

本学では、2012年に音楽単科大学では初の「司書課程」を開設しました。これは、岸本先生がいらしたから実現したことでした。先生は、音楽資料に精通した「音楽司書」の育成に力を注ぎ、司書課程の学生が、卒業後、図書館や企業で活躍することを期待されていました。私も昨年、司書課程の授業を受け持つことになり、微力ではありますが、先生から教わったことを少しでも多く、学生たちに伝えていきたいと日々努めております。

先生は、IAMLについてもゼロから教えてくださり、「次世代を担う現役の図書館員にもっと参加してほしい」「日本の音楽図書館界が世界から遅れをとらないように」

「ライブラリアンの視野が世界に向くように」「グローバルスタンダード”を知っておくように」と常々おっしゃっていました。また、私が無謀にも国際会議に参加してみたいと相談した際は、あらゆる面でご協力くださり、背中を押してくださいました。直前まで不安で迷っていた私に「あまり考えすぎず、時には、流れに身を任せてみたら…」というお言葉をかけてくださいました。大らかで懐が深い、岸本先生らしいお言葉でした。また、私が現地で困らないようにと、一緒に参加する日本支部の方達に私の世話をお願いしていただきました。おかげで、現地では支部の方たちに助けていただき、とても充実した楽しい国際会議となりました。

私は、図書館員としてのスタート地点で先生に出会えたことがとても幸運でした。無知な若者だった私の目指すべき方向性を教えてくださった岸本先生に、感謝の気持ちでいっぱいです。図書館は、一見、硬い雰囲気にも思われがちですが、先生のおかげで、ユーモアあふれる、利用者に寄り添った図書館を目指すことができます。先生に繋いで頂いたご縁を大切に、これからも日本の音楽図書館界に貢献していくことがご恩に報いることにつながると願っております。

春になると、本学図書館ではショーワームのオリジナルグッズを作成します。先生は、毎年「今年のグッズはな～に？」とチャーミングな笑顔で図書館にいらっしやり、新しいグッズをお渡しすると、いつも喜んでくださいました。感謝の想いととも、これからもショーワームのグッズが先生に届きますように…。心より、ご冥福をお祈りいたしますとともに、尊敬の念をもって追悼とさせていただきます。

(昭和音楽大学附属図書館)

岸本先生との思い出

栗林あかね

ピアニスト原智恵子を一生涯の研究テーマにしていきたいと、無謀とも言える修士論文の研究テーマを相談した際に、「あら、それは大変なことねえ」と間髪を入れず穏やかに受け入れてくださったこと、その後、関係資料を所蔵する玉川大学で「ガスパール・カサド 原智恵子コレクション」の仕事に携わるようになったときに、「本当はあの時（一生の仕事は原智恵子宣言）、内心どうしようかと思っていたの。色々な意味で。」と、ニコニコと意味のあるようなないような、そんな笑顔で話された岸本先生を、昨日のように思い出します。岸本先生は、昭和音大の先生方や学生から、親しみを込めて「お母さん」と呼ばれるほどに、懐が深く穏やかで暖かい方でした。

岸本先生からの後押しもあって無事に原智恵子进行研究テーマに据えた私は、演奏会プログラムの整理をしつつ、そのプログラムから演奏曲目を抜き出して、その傾向を調査・分析し、論文を執筆しました。演奏データを作成していく際に、目録や書誌、典拠、統一標目、著者標目…などという馴染みのない言葉とその意味について、図書館の歴史を繙くところから教えていただきました。また論文指導の多くの時間において、岸本先生の青春時代と重なる 1940 年代～70 年代の日本や世界を取り巻く環境、情勢という時流も伺いました。「自分が生まれ育った時代の雰囲気、少しでも後世へ伝えることが自分の役割だと思っているの。何かの役に立つことがきっとあるでしょう」と、岸本先生は折に触れて仰っていました。なんとこの論文指導がきっかけで、原智恵子の御子息と岸本先生が同じ幼稚園に通う幼馴染で、園からの帰りには御子息の御宅に寄っていたという事実が明らかに！先生ご自身も、最初はその事に気付かれてはいませんでした。そういった背景も手伝って、先生の幼少期の思い出話が止まらなくなってしまい、さまざまな話題へと発展していったということでもありますが、まるで「お導き」のように研究のための素材が集まっていく様子に、不思議なご縁を感じました。肝心の論文は「事実に基づいて、根拠がきちんと明示されて建設的に述べられていればい

いのよ」と仰って頂いたことをこれ幸いとして自由に書き進めてしまい、後に冷静になった自分自身が読み返して不安になるほど、のびのびとしたものに仕上がりました。

大学院を修了する直前、この先どうしようかとぼんやりしていたところで図書館の仕事を勧めてくださったのは、岸本先生でした。大学図書館での経験を経たのち、縁あって「カサド・原コレクション」を所蔵する母校の博物館に務めることになり、数年後には『ガスパール・カサド 原智恵子コレクション目録』（2016）を刊行することが出来ました。このときのプロジェクト委員として岸本先生をはじめ、岸本先生からご縁を頂いた先生方にもお力添えをいただきました。このプロジェクトを進めていく中でも、岸本先生は、日本の音楽図書館の歴史や図書館等における音楽資料の扱いとその重要性を説かれていました。「日本人は細かく分類しすぎて、結局整理できなくなる」「細かく分けることが、必ずしもいい結果を出すことにはならない」など、資料への向き合い方について改めて学ぶとともに、自分のプロジェクトに恩師を呼ぶことができた、ということが何よりも嬉しいことでした。

2017 年 10 月、先生とふたりで京都の南禅寺を訪れました。ここには、先生のお祖父様である澤田源一先生（東京美術学校第 7 代校長、東京女学館第 8 代館長）が眠っておられます（分骨されているので、東京にもお墓があります）。何十年ぶりというお墓参りと周辺の散策をしみじみと喜んでいる先生の隣では、南禅寺名物の豆腐料理を食べに行こうと言い出せませんでした。その代わりというわけでは無いのですが、おばさまとの思い出の味のひとつという、鍵善良房のくずきりを一緒に楽しみま



お祖父さま・澤田源一先生の墓前にて



思い出の味「鍵善」のくずきり

た。幼少期以来の味と懐かしそうに、少女のように可愛らしいご様子で、大事に召し上がられていたお姿を忘れられません。帰りの新幹線で、先生が「やっぱりお豆腐も食べればよかった」と呟かれたことに、しまった！あそこはおねだりする場面だった…、と後悔したのも楽しい思い出です。

岸本先生が昭和音大をご退職される時、折に触れて気にかけてくださる先生に、何か恩返しをしていきたいと考えました。そこで、ご自宅を訪ねて身の回りの御用を伺おうと、ほぼ突撃に近い形でご自宅を訪ねようになりました。毎回ティータイムやお食事を一緒にしては、アメリカやイタリア留学時代のこと、ご家族、破天荒な伯父様（澤田隆治氏、日本航空入社後にアメリカ支社等を経てベイルート支店長を務めアラブ全域に出張し、関連書を執筆した）との中東旅行などのお話を伺いました。稀に「金ちゃん（ご主人）には絶対内緒にしていたの」と若い頃の甘酸っぱい思い出や、もちろんご主人との純愛エピソードも伺いました。私は不出来な教え子でしたが、なかなか深くプライベートな話題をお話していただけたということは、それなりに心を許して下さっていたのではないかと、調子の良いことを思っています。

私を導いてくださった岸本先生には、日々感謝するばかりです。先生からいただいたご指導は、大きな財産として私を助けてくださいます。私もまた、岸本先生からいただいた研究の糧を次の世代へ伝えられるよう励んで参ります。

先生のこれまでのご功績に深甚なる敬意を表し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。どうぞゆっくりとお休みください。ありがとうございました。

（玉川大学教育博物館講師）

岸本宏子先生 略年譜・主要業績等一覧

【略年譜】

1943 年（昭和 18 年）*

東京新宿区に生まれる。

1966 年（昭和 41 年）

東京藝術大学音楽学部楽理科卒業（卒業論文『ジェスアルドの音楽とその背景, 5 声マドリガーレを中心に』**）。

1968 年（昭和 43 年）

東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程（音楽学専攻）修了（修士論文『ルーカ・マレンツィオの 5 声マドリガーレ』）。

同大音楽学部楽理科非常勤副手となる（1969 年まで）。

1969 年（昭和 44 年）

フルブライト留学生として米国プリンモア・カレッジ大学院博士課程入学（Isabelle Cazeaux 教授に師事）。

1972 年（昭和 47 年）

博士論文執筆の資料調査で滞在したポローニャにて、IAML 年次大会に参加。

1973 年（昭和 48 年）

東京藝大音楽学部楽理科非常勤講師となる（1975 年まで）。

1975 年（昭和 50 年）

プリンモア・カレッジ大学院博士課程修了（博士論文 "Secular Works of Luca Marenzio"）。

この頃 Barry S. Brook 教授（ニューヨーク市立大学）と知り合い、RISM、RILM、RIDIM 等のプロジェクトに関わり始める。

1976 年（昭和 51 年）

東京藝大音楽学部楽理科常勤助手となる（1978 年まで）。

1978 年（昭和 53 年）

米国シモンズ・カレッジ大学院修士課程入学（図書館学専攻）。

1979 年（昭和 54 年）

John Ward 教授（ハーバード大学音楽学部）の私的助手となる（1980 年まで）。

1980 年 (昭和 55 年)

シモンズ・カレッジ大学院修士課程修了 (修士論文”Tentative Curriculum for Music Library Technical Assistantship at Shobi Junior College of Music and Music Information Studies, Tokyo, Japan”)

1981 年 (昭和 56 年)

尚美音楽短期大学音楽情報学科助教授となる***。

1982 年 (昭和 57 年)

病を得て尚美音楽短期大学を退職。

1985 年 (昭和 60 年)

『ニューグローヴ世界音楽大事典』和訳プロジェクトのリーダーとなる (1989 年まで)。

1988 年 (昭和 63 年)

IAML 東京会議開催、事務局長を務める。

金子正之氏と結婚。

1994 年 (平成 6 年)

昭和音楽大学短期大学部非常勤講師となる (2002 年まで)。

2002 年 (平成 14 年)

昭和音楽大学音楽学部・大学院音楽研究科教授となる。

2007 年 (平成 19 年)

同大附属図書館長となる (2012 年まで)。

2009 年 (平成 21 年)

同大学院音楽研究科長となる (2012 年まで)。

2011 年 (平成 23 年)

学校法人東成学園評議員となる。

2012 年 (平成 24 年)

昭和音楽大学・同大短期大学部に司書課程設置、「音楽図書館特論」等を担当。

2014 年 (平成 26 年)

昭和音楽大学大学院音楽研究科特任教授となる (2017 年まで)。

2015 年 (平成 27 年)

夫・金子正之氏永眠。

2017 年 (平成 29 年)

昭和音楽大学を退職、同大名誉教授となる。

2020 年 (令和 2 年)

10 月 9 日永眠。

【講師歴】 (略年譜記載のものを除く)

東京藝術大学 (1983~1993、1994~2002、2010~2011)

宮城学院女子大学 (1984~1985)

電気通信大学 (1985~2004)

明治学院大学 (1992~1994)

【書籍】**(単著)**

“Il fondo musicale Venturi nella biblioteca comunale di Montecatini Terme”

(イタリア トスカナ県・La Nuova Italia[共同出版], 1989)

『ルネサンスの歌物語』(音楽選書 ; 57) (音楽之友社, 1989)

(共著)

『音楽取調掛時代所蔵目録』(東京藝術大学附属図書館, 1970)

『音楽用語定義集』(シンフォニア, 1979)

『音楽の基礎資料』(アカデミア・ミュージック, 1985)

『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』

(アルテス・パブリッシング, 2020)

(翻訳)

『名曲の旋律学：クラシック音楽の主題と組立て』

(ルドルフ・レティ著；水野信男共訳, 音楽之友社, 1995)

『上手に歌うための Q&A：歌い手と教師のための手引書』

(リチャード・ミラー著；長岡英共訳, 音楽之友社, 2009)

『歌唱の仕組み：その体系と学び方』

(リチャード・ミラー著；八尋久仁代共訳, 音楽之友社, 2014)

(共同監修)

『楽典：まとめと問題』

(西岡龍彦著, アカデミア・ミュージック, 1986)

『西洋音楽史：譜例と解説』

(坂崎紀編著, アカデミア・ミュージック, 1986)

(日本語版制作協力)

『15 世紀の音楽生活』(人間と音楽の歴史Ⅲ 第 8 巻)

(エドモンド・A・ボールドズ著, 音楽之友社, 1986)

【学術論文・記事】

〔単著/編/訳〕

- 「ドン・カルロ・ジェスアルド」
 (『音楽芸術』24(10) p.36-38, 1966.9)
- 「ルーカ・マレンツィオの 5 声マドリガーレ」
 (『音楽学』(14) p.139-150, 1969.10)
- 「思い出」
 (東京女学館編『追悼』(東京女学館, 1975) p.12-16)
- 「『国歌按』撰定ノ事」
 (東京芸術大学音楽取調掛研究室編『音楽教育成立への軌跡：音楽取調掛資料研究』(音楽之友社, 1976) p.283-305)
- 「日本の RISM」
 (『IAML 日本支部ニューズレター』(1) p.6-7, 1982.10)
- 「米国全国書誌 LC-MARC の楽譜・録音資料の取り組みは何故遅れているのか」
 (平尾行蔵, 松下鈞共編『コンピュータ時代の図書館と視聴覚資料』(音楽図書館協議会, 1983) p.12-18)
- 「十進分類法にファセット分類を加味した分類表: デューイ十進分類表音楽部門改定案について」
 (平尾行蔵, 松下鈞共編『コンピュータ時代の図書館と主題検索』(音楽図書館協議会, 1984) p.1-21)
- 「ASIS の倫理綱領制定 (Frontline 1)」 [翻訳]
 (『MLAJ newsletter』7(1) p.4-5, 1985.5)
- 「情報と規格の話」
 (『MLAJ newsletter』7(2) p.46-47, 1985.7)
- 「情報と規格の話(2)」
 (『MLAJ newsletter』7(4) p.21, 1985.11)
- 「最近の話題」
 (『MLAJ newsletter』7(5) p.40, 1986.1)
- 「ミルウォーキー便り」
 (『MLAJ newsletter』7(6) p.43, 1986.3)
- 「イタリア声楽史におけるマドリガーレ」
 (『東京芸術大学音楽学部年誌』(11) p.63-81, 1986)
- 「十八世紀のあるイタリアの地方貴族の音楽生活：ヴェントゥーリ・コレクションの整理作業の記録から」
 (角倉一朗[ほか]編『音楽と音楽学：服部幸三先生還暦記念論文集』(音楽之友社, 1986) p.239-253)

“Music Periodicals in Japan — A Comprehensive List”
 (*Fontes Artis Musicae* 36(1) p.38-43, 1989.3)

「MLAJ 音楽分類表 (試案)」
 (『MLAJ newsletter』12(1) p.6-21, 1990.5)

「音楽資料の分類と検索：DDC の日本における使用の実際」
 (音楽図書館協議会編『音楽情報と図書館』(音楽図書館協議会, 1995) p.88-110)

「ブルック氏を偲んで」
 (『IAML 日本支部ニューズレター』(8) p.4-5, 1998.3)

「サン・セバスティアン会議に出席して」
 (『IAML 日本支部ニューズレター』(10) p.8-10, 1998.7)

「マドリガーレにおける歌詞の傾向」
 (『東京芸術大学音楽学部紀要』(25) p.41-60, 2000.3)

「マレンツィオの 3 声ヴィツラネッラにおける歌詞の選択：マドリガーレにおける歌詞の傾向(3)」
 (『東京芸術大学音楽学部紀要』(26) p.25-45, 2001.3)

「エディンバラ雑感」
 (『IAML 日本支部ニューズレター』(15) p.3-4, 2001.4)

「マレンツィオの 4 声マドリガーレにおける歌詞の選択：マドリガーレにおける歌詞の傾向(4)」
 (海老澤敏先生古希記念論文集編集委員会編『モーツァルティアーナ：海老澤敏先生古希記念論文集』(東京書籍, 2001) p.268-277)

「マレンツィオの 2 つのマドリガーレ曲集における歌詞の選択：マドリガーレにおける歌詞の傾向(6)」
 (『東京芸術大学音楽学部紀要』(27) p.29-42, 2002.3)

「世紀末の「死」：ルネサンス末期の声楽曲における歌詞選択の一側面〈マドリガーレにおける歌詞の傾向(5)〉」
 (『転換期の音楽』編集委員会編『転換期の音楽：新世紀の音楽学フォーラム：角倉一朗先生古稀記念論文集』(音楽之友社, 2002) p.108-121)

「音楽芸術活動のさらなる活性化を図るための高等教育機関の果たす役割についての研究：中間報告 初年度の活動」
 (『昭和音楽大学音楽芸術運営研究所紀要』(3) p.1-20, 2004.3)

“Words for Marenzio's five-voice madrigals—Words for Music: Choice of Texts in Italian Madrigals (2)”

(Paul-André Bempéchat (ed.) *Liber amicorum Isabelle Cazeaux: symbols, parallels and discoveries in her honor* (Pendragon Press, 2005), p.321-347)

「文化庁委託事業『日本の音楽資料』調査委員会報告」
 (『IAML 日本支部ニューズレター』(38) p.4-5, 2010.1)

「音楽芸術活動のさらなる活性化を図るための高等教育機関の果たす役割についての研究：第 2 年次の活動としめくくり」
 (『昭和音楽大学音楽芸術運営研究所紀要』(4) p.1-9, 2005.3)

「卒業生へのサポートについてのレポート：教職員レポートからの意見紹介」
 (『昭和音楽大学音楽芸術運営研究所紀要』(5) p.19-26, 2006.3)

「音楽大学における司書養成について：昭和音楽大学の場合」
 (『IAML 日本支部ニューズレター』(44) p.8-10, 2012.5)

「日本支部第 57 回研究例会の企画について」
 (『IAML 日本支部ニューズレター』(53) p.9-12, 2015.5)

「遠山邸」
 (『IAML 日本支部ニューズレター』(55) p.7-8, 2015.12)

「随筆：ヒトの役割 私の役割」
 (『音楽療法研究』(4) p.65-76, 2014)

「生きていくための、ひとつの助言」
 (『音楽療法研究』(6) p.5-8, 2016)

「科研費によって開かれた学際的音楽学の可能性：「歌う声の研究」の端緒と展開」
 (『昭和音楽大学研究紀要』(35)p.107-122, 2016.3)

「生きている私 いろいろな思い出」
 (『音楽療法研究』(8) p.5-7, 2018)

〔共著〕

「音楽学と音楽図書館：日本音楽学会関東支部 12 月例会の記録」
 (『MLAJ newsletter』16(1) p.1-20, 1995.4)

“An Acoustical Study of Singing Formants in Female Voices (Part 1)”
 (『昭和音楽大学研究紀要』(29) p.13-26, 2010.3)

“Some acoustic characteristics of emotional singing”
 (『昭和音楽大学研究紀要』(30) p.4-13, 2011.3)

“A look at perception and production of sustained vowels by two soprano singers”
 (『昭和音楽大学研究紀要』(31) p.4-12, 2012.3)

「歌うことを科学する：学際的研究が音楽教育にもたらす可能性」
 (『昭和音楽大学研究紀要』(32) p.4-14, 2013.3)

「音楽療法士を対象とした発声訓練プログラム：開発に向けた予備的研究」
 (『音声言語医学』54(3)p.186-196, 2013.7)

【共同研究報告書】

『「音声学の学際的研究のための基礎研究」：平成 21-22 年度共同研究活動報告書』
 (昭和音楽大学, 2011)

[岸本宏子研究代表]『歌う声をめぐる学際的研究』(科学研究費補助金(基盤研究 C)研究成果報告書；平成 22 年度-平成 24 年度)
 (昭和音楽大学, 2013)

『平成 24~25 年度共同研究報告書：「歌唱指導法の基礎研究：指導技術の改善を目指して」』
 (昭和音楽大学, 2014)

註:

*...略年譜中の記述は特記のない場合を除き岸本宏子『最終講義 2017.2.26「そして、生きる」』(昭和音楽大学最終講義での配布資料)による。また、各種の主要業績は『岸本宏子：研究業績表』(同配布資料)、『研究業績等に関する事項』(https://www.tosei-showa-music.ac.jp/albums/abm.php?f=abm0001544.pdf&n=岸本教授_業績.pdf)、国立国会図書館サーチ(<https://iss.ndl.go.jp/>)、昭和音楽大学附属図書館 OPAC(<https://lib.tosei-showa-music.ac.jp/index.php>)などに記載の書誌情報を参照の上、特に図書館学関係のものに留意しつつ、著作を中心にまとめた(一部の書籍・学術論文・記事等は現物での確認も行った)。なお、本稿でのウェブ上の情報源の閲覧日はすべて 2021 年 6 月 21 日である。

***...タイトルは以下 URL の「楽理科卒業論文検索」による。
<http://fms.ms.geidai.ac.jp/fmi/iwp/cgi?-db=1.楽理科卒業論文-loadframes>

***...同短大の辞令交付簿による(本略年譜作成にあたり尚美学園大学様にご確認頂いた)。

(作成：工藤哲朗)

事務局だより

○支部会員の訃報：村井範子氏

2020 年 12 月 17 日、当支部元事務局長でフェリス女学院大学名誉教授の村井範子氏が亡くなりました。

村井氏は東京藝術大学専攻科修了後、同大副手や講師を経て米国・ハーバード大学大学院に留学、その後フェリス女学院大学などで長きにわたり後進を育成するとともに、特に西洋音楽史テキストの日本語訳刊行に注力され、日本での音楽史の基本文献の整備に大きく貢献されました。

村井氏は留学後の 1962 年、遠山一行氏とともに IAML の会員となり、1979 年の当支部設立では中心的役割を果たされました。さらにその後も 1988 年の東京会議はもとより、1995 年までの低迷期にも、個人的に支部を支援くださいました。

当支部を長い間支えてくださった村井範子氏のご逝去に際し、謹んで哀悼の意を表します。

なお、2021 年 2 月には当支部会員の中西紗織氏との共著『音楽学研究物語：村井範子が語る日本における音楽学研究のあけぼのとその時代』（芸術現代社）が刊行されており、同書では当支部の設立についても 1 章が割かれています。また、支部 Newsletter では村井氏の追悼特集も準備中です。

○2021 年オンライン大会の登録受付始まる

Digital Libraries for Musicology (DLfM) との共同でのオンライン開催となる今年の大会について、参加登録の受付が開始されました (7/23 〆切)。参加は会員・非会員とも無料、ただし各セッションの録画は会員のみでの公開となります。詳細は以下 URL を参照。

<https://www.iaml.info/congresses/2021-online>

○「音楽文献目録オンライン」の公開

2021 年 4 月 1 日、音楽文献目録委員会により印刷資料として発行されてきた『音楽文献目録』がウェブへと移行し、「音楽文献目録オンライン」が公開されました。同委員会の母体団体である当支部の会員は、このデータベースを利用することができます。詳しくは同委員会及

び「音楽文献目録オンライン」のウェブサイトをご参照ください。

・音楽文献目録委員会：<https://rilm.jp/>

・「音楽文献目録オンライン」：<https://rilm.jp/database/>

○IAML/RILM 合同会議ウェブサイトの保存

2018 年に当支部の主催で開催された IAML/RILM 合同会議「アジアの音楽情報と国際協力の推進：音楽資料の調査と音楽図書館の連携」のウェブサイトが、「国立国会図書館インターネット資料収集保存事業」(WARP) による収集・保存の対象となりました。保存されたウェブサイトは、以下 URL から閲覧可能です。

<https://warp.da.ndl.go.jp/waid/32152>

■編集後記■

本号は、長きにわたり当支部を支えてくださり、昨年 10 月 9 日に逝去された岸本宏子先生の追悼特集としてお送りいたしました。

生前の岸本先生とご親交の深かった 6 名の方には、いづれも追悼文の執筆をご快諾頂き、充実した内容のご原稿をお寄せ頂きましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。一方の略年譜・主要業績等一覧は、紙幅や準備期間の限界から内容・体裁に不備も多々あるかと思われ、これについては読者のみなさまのご批正を待つところですが、本号が岸本先生のご功績とお人柄を未来へと伝えていくうえで少しでも役立つようでしたら、編集担当としては望外の喜びです。

なお、次号では支部総会報告および第 68、69 回例会の概要と傍聴記をお届けの予定です。(工藤)

Newsletter - 国際音楽資料情報協会日本支部

第 70 号

(2021 年 6 月 30 日発行)

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部

〒480-1197 愛知県長久手市片平 2-9

愛知淑徳大学人間情報学部伊藤真理研究室内

(担当：工藤)

<http://www.iaml.jp>